

チョイ・カファイ パブリックトーク

「Unbearable Darkness Research」

開催日時:2017年8月4日(金) 19:00-20:30

開催場所:森下スタジオ

本日はお越しいただきありがとうございます。今回のリサーチやインタビューでご協力いただいた方々にもお越しいただき、またこのようなかたちでリサーチの結果を共有することができ、とても嬉しく思っています。実はこのプロジェクトの日本でのリサーチはこれで三度目です。一度目は自分自身の興味を追求するために自己負担でリサーチを行いました。その後、とても幸運なことに国際交流基金アジアセンターから助成を受けて二度目のリサーチを、それに続いて、セゾン文化財団から助成を受けて、三度目のリサーチとなりました。

舞踏との出会いと『Unbearable Darkness』

私はシンガポール出身ですが、約15年前からシンガポールを離れて活動しています。それはなぜかという、シンガポールの状況・環境というのがあまり理想的なものだと感じなかったからです。過去4~5年の間、ヨーロッパを拠点とし、現在はベルリンを中心に活動しています。

舞踏との出会いは、1999年頃だったと思います。それから約10年間、私にとって舞踏は山海塾とイコールなものでしたが、2009年に日本を訪れた時に初めて『夏の嵐』という土方巽の作品の映像を見て、私の舞踏に対する考え方・見方というのが完全に変わりました。それは土方巽、そして彼の踊りというのがとても遊びに満ち溢れているもの、あるいは少し意地悪なもので、これを見た時に山海塾とは全く違うものを感じたからです。その後、私は『永遠の夏の嵐 (Eternal Summer Storm)』という作品を作りました。これはビデオインスタレーションで、筋電センサーを使って映像を作りました。それから、3年間に渡り、『Soft Machine』という作品に取り掛かりました。これはアジアのあらゆるアーティストのリサーチ・インタビューを作品にしたもので、日本のアーティストにはインタビューをする際には「舞踏からの影響への不安、恐れ」をテーマとしました。

2016年、アーティストの掬子びじんさんが、韓国の光州にあるアジア・アーツセンターの「Our Masters Series」という企画で、土方巽を取り上げたキュレーションを行いました。そのプロジェクトで私に作品創作を依頼してくれました。それが、現在、取り組んでいる『Unbearable Darkness』という作品の発端となっています。最終的に、このプロジェクトはキュレーションに関する問題があったため光州で実現できませんでしたが、私は掬子さんと一緒に創作活動をしたいたいと思い、彼をこのプロジェクトに呼び戻すことにしました。

『Unbearable Darkness』の創作アイデア

このプロジェクトの最初のインスピレーションを得たのはYouTubeでCNNのビデオを見た時で、私は疑問を持ちました。それは、国際的な意味で今日の舞踏というのが一体どういったも

のかということ、それから国際的に活動している舞踏家たちがどのように活動を展開しているのかということでした。

(ビデオ再生)

これは日本国外で行われている舞踏の実践の一例です。これが私の興味を駆り立て、世界的にこういった活動を展開している方々を見つけ出してインタビューをしようと思いました。それらのインタビューに『舞踏の伝道師たち (Evangelist of Butoh)』という題名を付け、映像にまとめました。

(ビデオ再生)

これら2つの映像はベルリンで行ったインタビューを撮影したもので、これは私にとってとてもエキサイティングなインタビューになりました。なぜなら、私は最初の3か月間、ベルリンで自分が誰なのか、一体何をやっているのかということを中心に全くとにかく明かさずに舞踏関係のイベントに潜り込んで、舞踏についての調査を行っていました。最初に行ったイベントが「ベルリン舞踏チャンネル (Butoh Channel Berlin)」という団体が主催している「コンテンポラリー舞踏ミーティング (Contemporary Butoh Meeting)」というとても面白いイベントで、主催者が現代の舞踏に関する発言をした時に、「私はこの部屋に土方巽の存在を感じ取ることができます」ということを言っていました。やがて少しずつ彼らの信頼を得て、こういったインタビューの映像を撮ることができるようになりました。その後、モティマル (MOTIMARU) という舞踏をやっている二人のアーティストに出会いました。彼らはとても素敵なアーティストで、二人とも大野一雄舞踏研究所で訓練を積んだ後に、数年前から拠点を移して現在はベルリンで生活しています。そこで、私は彼らに日本を離れた理由、それから日本国内・国外での活動がどのように異なっているのかを聞きました。

(ビデオ再生)

世界中の様々なところに舞踏のコミュニティが存在しますが、共通点は、その舞踏のコミュニティというのは閉鎖的で、舞踏と銘打った作品であるとそれを観に来る観客はある程度決まった客層になってしまうという点が挙げられます。モティマルの二人は舞踏とチベットの伝統や儀式といったものを混ぜて作品を創作しようとしていて、私は彼らがやろうとしていることは面白いと思います。彼らは舞踏のワークショップも開催していますが、舞踏というのはあくまで名前だけで、実際に彼らが教えているものは、彼ら自身が発展させている作品の作り方やトレーニング方法です。私は、これらは重要なことだと思っています。なぜかという、そうでないと舞踏というものがあくまでもエキゾチックなもので終わってしまうからです。彼らはワークショップを開催する際に舞踏という名を冠することがありますが、実際にパフォーマンス・公演をする際はより多くの観客を集めるために舞踏という名前を使わないそうです。

そこで、私は舞踏あるいは文化の地域性に着目しました。日本国内での舞踏と、日本の外に出ていった舞踏の違いについてです。

(ビデオ再生)

私は彼女の発言の多くに賛同します。それと同時に、舞踏に関わっている全ての方々が日々稽古を積み重ねていること、また舞踏を世界に広めるために活動していることについて尊敬しています。

今年の4月に日本で二度目のリサーチを行い、札幌で開催された「札幌国際舞踏フェスティバル」に行ってきました。このことが、私にとって今回のリサーチのプロセスの中でかなり大きなインパクトを持っています。札幌国際舞踏フェスティバルで8作品を観たのですが、そこで観た全ての作品が舞踏の様相を呈していたけれど、舞踏であるのかと問われるとそうではない、という印象を受けました。もちろん、私はフェスティバルで作品を発表していた全ての方々に尊敬の念を持っていて、それと同時に観客が作品と繋がりを持って鑑賞しているというように感じました。そして、この経験が私に問いを与えてくれました。それは、現代の日本で舞踏を続けていくこととは一体どういうことなのか、また舞踏は今後発展・進化を続けていくべきものなのか、あるいはそうではないのかという疑問です。最終的に私が得た結論は、舞踏について、または既に亡くなった舞踏のマスターについて、我々はあまりに強い記憶・思い出を持ち続けているのではないかということです。もしかすると、それらを少し忘れてみることで、舞踏が一步前に進むためのヒントになるのではないのでしょうか。

東北でのリサーチ

今画面に出ているのは、去年の秋に開館した、秋田県の羽後町田代にある鎌鼬美術館です。写真家の細江英公が撮影をして、土方巽が被写体となった『鎌鼬』という写真シリーズに私は元々興味を惹かれていました。ですので、彼らが実際に撮影をした場所にもとても興味があつて、そこがどういう場所なのかを見てみたかったのです。このことも私が舞踏について考えていく上での一つの出発点になっています。去年4月に初めて羽後町田代に訪れた際に、私は自分でBBCのドキュメンタリーを模した映像を撮ってみました。

(ビデオ再生)

土方巽が突然、細江英公と一緒にこの村に現れてこの写真シリーズの撮影を始めたことを、一体人々はどのように感じたのかということに興味を持ったので、これについてのインタビューも行いました。通常私がリサーチをする時は、本や映像・インターネットなど、2・3・4代目の舞踏家を書いた、あるいは発信した情報を見ているので、今回は実際に土方巽と会って交流をしたことがある人に話を聞いてみたいと思いました。

(ビデオ再生)

彼女は今99歳であり昔のことを覚えていないようで、彼女がこれは自分だと指差した写真の人物は彼女自身ではありませんでした。ですが、私にとってはこのインタビューの時間がとても美しく思えました。この鎌鼬美術館が開館する前、美術館設立に向けた地元住民による「鎌鼬の会」という組織があり、その中でお互いの記憶が共有され、その共有された記憶がリサイクルされている部分があると感じました。

今までの3回のリサーチの中で、記憶というものが徐々に変化し、それらがやがて結晶化していくのはどの瞬間なのか、ということに疑問に思いました。なぜなら、それは自分が創作をしていく過程の中でも多々起こることだからです。今年の2月のリサーチでは、約20人の舞踏関係者、あるいは土方と関係のあった人々とお会いしてインタビューを行うことができました。その中で、最後に必ず「もし今土方に会うことができるとしたら、どのような質問を投げかけますか」ということを伺いました。

(ビデオ再生)

こういった人々との出会い、それからこういった答えを聞いて、もし土方が今生きていたらどのような作品を作るだろうか、どんなことをするだろうかという新たな疑問が湧き上がりました。例えば、インタビューの中で人工知能のようなものを使って創作をするのではないか、という意見もありましたが、実は私が先月新たに発表した作品がまさに人工知能を使ったものだったので、この考えには大きな衝撃を受けました。

土方巽との対話

これらの経験を経て、もし今土方が生きていたら何をするのか、またこれまで感じた数々の疑問についての答えを知るためには土方本人に直接聞くしかない、という結論に至りました。そして、その後2月に恐山に行きました。訪れた時期は恐山が閉山中で中に入ることができませんでしたが、恐山から正式な認定を受けているイタコを見つけることができました。彼女は羽織のようなものを着ていて、白い羽織に「恐山」と書いてあります。ではここで、土方巽の霊と直接話した映像を初公開します。

(ビデオ再生)

霊を一人降霊させてもらうのに3,000円かかります。今回のプロジェクトでは何度か霊を呼んでもらったので、制作費用の内訳に「降霊費用」という項目が入っています。元々、土方の霊と実際に話をしてみようと思った時に、そのアイデアにはとても惹かれていたのですが、イタコの「口寄せ」という行為には懐疑的な部分がありました。「口寄せ」が本物でも、私たちは実際に土方巽を知る者ではないので降霊してくれないのではないかという思いもありました。ですので、今年の土方巽の三十一周忌に彼のお墓に行き、お墓を綺麗に掃除してきました。その時、このようなプロジェクトを進めていくことに許しを貰えないか、とお祈りをしてきました。現在は、土方巽の霊と実際にきちんと話ができたと私は信じています。私は約20個の質問を用意していましたが、その内の6個しか質問をすることができませんでした。なぜかという、その場の状況、その存在感に圧倒されていたからです。先週恐山の霊体祭があったので、そちらにも行ってきて二度目の土方の口寄せをしてもらいました。今回の目的はコラボレーター且つ出演者である振子びじんを紹介することでした。10分間の口寄せのために4時間列に並び、やっと口寄せをしてもらうことができました。また、実際に恐山で撮影をさせてもらえないかと和尚さんにお問い合わせしたところ、撮影禁止ということで断られてしまいました。ですが、こっそり撮影してきました。

口寄せ中、土方さんに今回の創作についてのインスピレーションを貰えないかという質問をして、「山岳信仰」「神聖な山」という答えを頂きました。加えて、11月にデュッセルドルフでリハーサルを始めるので、土方さんにも一緒に来てもらえないかということもお願いしました。事前に土方さんは飛行機に乗るのをすごく怖がっていたという情報を聞いていたので、実際にそうなのかなと思っていましたが、最終的にははっきりと来てもらえるというお返事を貰うことはできませんでした。また、通訳の井上さんにはイタコの見習いになっていただくようお願いしておきました。

今後の展開

来週から掬子さんと稽古を始めますが、制作を進めていく方法については明確なアイデアを持っています。まず始めに、土方自身が作った作品についての問いです。欧米の視点・切り口からアプローチをし、その後日本でリサーチをして、最終的には土方本人と話をしました。そのプロセスで、土方の『禁色』と彼の最後の作品である『東北歌舞伎』という作品をじっくり見ました。現在は、ありとあらゆる手法を使って、土方巽の声や体を実際に皆さんにお見せすることができる方法を探っています。それと同時に、土方巽に私たちと一緒に作品に出演してもらう、あるいは掬子さんとコラボレーションしてもらう方向で進めています。ですが、ここで一つ問題があります。降霊という形で土方には作品に出演してもらうと考えていましたが、先程ご紹介したイタコの松田さんが多忙な方で、秋頃までスケジュールが全く空いていないそうです。ですので、彼女に実際に制作過程に関わっていただきたい気持ちはありますが、私たちでできる方法も探っていこうと思います。今回、モーションキャプチャーのセンサーを持ってきているので、制作・リハーサルの過程の中で掬子さんに実際に付けて踊ってもらい、土方のアバターを作ってみようと考えています。これは私が『夏の嵐』を踊っているアバターの映像です。

(ビデオ再生)

もちろん今お見せしたものはとても初歩的なモーションキャプチャーのイメージで、ここに土方の顔などを当てはめていき、実際に土方が踊っている映像を作っていきます。ですが、実際に私が興味を持っているのは、例えばもし土方が舞踏以外の踊りをやっていたらどのような動きをするのか、という映像です。私はコンタクト・ゴンゾ (contact Gonzo) の非公式メンバーで、これは私がセンサーを付けてコンタクト・ゴンゾの動きをしたものです。ですので、例えば仮に、土方巽が亡くなる前にコンタクト・ゴンゾを見る機会があり、それにインスピレーションを受けていたらどのようなことになっていただろう、というようなことに興味があります。今お見せしているのは、人工知能を使って作り上げた、コンタクト・ゴンゾと舞踏を合わせた動きです。

(ビデオ再生)

こちらは一つの例で、このようにして想像力を発展させていけたらいいなと思っています。それから、来週掬子さんが実際に制作過程に本格的に関わってくれますので、もっと真剣な要素が盛り込まれていくかと思います。今ご覧いただいているのは私自身のアバターです。こういった形で顔や体を作っていくことができますので、再度土方アーカイブに伺って、様々な素

材をお借りしたいと思っています。これが、このプレゼンテーションの最後になります。もし何かご質問等があれば、みなさんの方からよろしく願いいたします。

(以下、質疑応答)